

みちのく

成人編

—第39号—



平成30年度刊
仙台矯正管区

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で三十九号を数えております。

掲載の作品は、当管区管内刑事施設の受刑者の応募作品の中から、各分野で御活躍の先生方が選定してくださったものを掲載しております。

なお、巻末には東北ブロック書画コンクールの入賞作品を掲載しておりますので、御覧ください。

平成三十一年二月

仙台矯正管区

表紙の題字は久道石静氏の揮毫によるものです。

目次

課題文『居場所』(3編)	2	歌壇	26
【選評】原田勇男先生	8	【選評】伊藤久子先生	30
自由文(3編)	9	俳壇	32
【選評】原田勇男先生	14	【選評】岩田諒先生	34
読書感想文(2編)	15	柳壇	35
【選評】原田勇男先生	19	【選評】佐藤岩男先生	37
詩苑	21	第四十四回東北ブロック書画コンクール	
【選評】原田勇男先生	25	入賞作品	41

《課題文》 課題『居場所』

繋がる居場所

山形刑務所 九州男

空手の地区大会が一ヶ月にせまる夏の終わり。俺は組手相手の攻撃を何とか捌きながら、苦しまぎれのローキックを放つ。

「どうした？そんなローじゃ全く効かねーぞ。もつとしっかり体重乗っつけろ！」

俺の胸にパンチを打ち込みながら、友也が言う。俺よりも周りは体が小さいはずなのに、何度やってもこいつには勝てない。

「うるせーな！蹴ってんだろが！痛てーくせに、やせ我慢してんじやねーよ！」

「してねーよ！お前の蹴りがへナチョコ過ぎんだよ！デケー体してんのによ！」

言い合いながら、俺達は組手を続けた。中学から空手を始めて三年。それまで出場していた小さな大会じゃなく、上位になれば全国大会へと繋がる大きな大会。ついにそんな大会に出場出来るまで来れた。

それもこれも全て、今、俺に容赦なく攻撃して来る友也のおかげだ。ま、そんな事、思いはしても絶対口には出さないけど。

そもそも俺は、素行が悪くガラも悪い、自分勝手な嫌われ者の不良だった。

小さい頃に両親が離婚。母に引き取られた俺は、転校先の小学校になじめず、次第に不登校になっ

た。

小六で親が再婚し、二度目の転校。そこでも周りに全くなじめず、体ばかり大きくなった俺は、ケンカやカツアゲ、万引きと非行に走り、完全に周りの奴等から「不良」のレッテルを貼られた。

友達も出来ず、悪さばかり繰り返す俺に、母親も新しい家族もすぐに口出ししなくなり、まるで「居ない人」みたいに扱われた。

別にそれでも良かった。自分の居場所なんてどこにも無くても、俺はお前等とは違う。一人でも寂しくない。一人でも生きて行けるんだと、教室で群れる奴等や、居間で笑い合う家族を見下しては、強がってた。

そんな俺と空手を出会わせてくれて、俺に居場所をくれたのが友也だった。

ある日、教室の片隅で一人だった俺に、「なあお前、ケンカ強いんだって？ならさ、俺と一緒に空手やらね？」

と笑って友也は俺に言った。「はあ？お前ふざけてんの？てか、誰だよお前。俺が誰だか分かって言ってるの？」

と、ケンカ腰で突っぱねる俺に、それでも友也はしつこく誘い続けた。

周りが注目する中、言い合った末に、「なら、道場で俺と勝負しろ！それで、お前が勝ったら誘うの諦めてやる。でも、俺が勝ったら一緒に空手をやる。これでどうだ！」

と訳の分からない事を言われ、まあ、こんなチビに負ける訳ねーしなと思ひ、俺はその勝負を受けてしまった。

そして俺は、自分よりも一周り位体の小さい相手に負けた。それは見事に。完膚無きまでに。ポッコポッコ。

「素人にしてはやるじゃん！やっぱお前、空手やるべきだよ。良い体してんだし！」

そう言っただけで無邪気に笑う友也を見ると、負けた悔しさよりも、出し切った清々しさの方が大きくて、何だか不思議な気分だった。

そして、それと同じ位、いつかこいつに勝ちたい。こいつより強くなりたい。こいつの見てる景色をいつか見たいと、強く思った。

それが俺の、空手の原点だった。空手を始めて、少しずつ自分も、周りも変わって行った。

まず学校では、友也がいつも俺につきまとうおかげで、一人だった時間が減った。

練習でいつもボロボロになるおかげで、ケンカやカツアゲをする余裕が無くなり、友也のバカ話しに笑っていると、周りの奴等も少しずつ俺に話し掛けて来るようになった。

人様に迷惑を掛けなくなったからか、家族まで俺に少しずつ接してくれるようになって行った。

練習はいつも、痛くて、辛くて、きつくて、何度でもグロ吐いたりケガもしたけど、何より自分が少しずつ強くなってく事と、変わってく事が嬉しくて楽しくて、たまらなかった。

昇級試験を受け、白帯から青、黄、緑、茶帯となり、昇段試験を経て、やっとの思いで黒帯、初段になれたのはこの春の事だ。

昇段試験では、皆が俺に力をくれた。同じ道場

の人達が十人組手の相手をやってくれたり、なぜか見に来ていた家族やクラスの奴等が、声を枯らして応援してくれた。

きつと皆の力と支えが、声援が無かったら、あんなに辛い十人組手をやりとげれなかったと思う。そして今、俺は全国大会の出場を目指して、友也と毎日、厳しい練習をしている。

そんなある日、ずっと痛みが長引いていた膝の痛みがあまりに酷くなり、範囲も広がって行つた。ただのいつもの打撲だと思っていたけど、どうもどこかおかしい。

俺は少し不安になり、病院に行つた。

「ただの打撲だね。その内治るよ。」

と言う一言を待っていた俺に届いたのは、

「骨肉腫。」

と言う、聞き慣れない病名だった。

「右足を切断すれば、今ならまだ命だけは何とか助かるかもしれない。」

医者言葉が冷たく背中貼り付き、全身の感覚を奪って行つた。

切断？足を？そんな事したら、歩く事も走る事も、大好きな空手も出来なくなる。もう二度と、友也と勝負出来なくなるじゃねーかよ。何でだよ。何で、俺なんだよ。

目の前の景色も、周りの音も、全てが濁って消えて行つた。心の中が、不安や恐怖、絶望と言つた黒い感情で一杯になって、知らない内に涙となつて溢れていた。

でも結局、俺は親や医者と相談して、右足を切断した。確実な死よりも、たった数パーセントで

も、生き残る為の希望を選んだ。

再発したり、転移したら、それも無駄になり俺は死ぬ。それでも家族やクラスの奴等が、道場の皆が、そして友也が、俺に生きろって言ってくれた。涙を流して、声を詰まらせながら願つてくれた。

その時初めて、俺は何て恵まれた幸せ者なんだって思った。こんな俺の為に、見舞いに来てくれて、励まし、泣いてくれる。

背中をそっと、優しく支えてくれる。

温かい。何て温かいんだろう。

俺は心から感謝した。支えてくれる家族や皆に、そして俺を変えてくれた友也に。

一ヶ月後、地区大会も終わり、友也は見事に優勝し、半年後の全国大会への出場を決めた。応援にすら行けなかった事が、もの凄く悔しかった。

「おめでとう！やったな！」

「まーな！実力が違いますから！」

病室に見舞いに来た友也が、いかにもおちやらける。二人で笑い合い、ふと友也に、ずっと聞きそびれてた事を思い切つて聞いてみようと思つた。今なら聞ける。そんな気がしたから。

「なあ、なんでお前、あの時俺を空手に誘つてくれたんだ？…何でいつも、あんなに俺の事かまってくれたんだ？」

友也は何だか少し恥かしそうに小さく鼻で笑つて、遠く窓の外を眺めた。

「お前、小さい時にさ、公園でイジメられてた奴を助けた事あるだろ？憶えてる？」

「え？小さい時？…あ、そう言えば…。」

俺の記憶が、友也の言葉で少しだけ動き出した。確かにそう言えば、最初に転校した頃に、そんな事があった。

「その時イジメられてたの、俺だよ。」

友也が笑つて、俺を見た。

「あの日、お前が助けてくれたから、俺もお前みたいに強くなるうって決めた。だから、俺は空手を始めたんだ。」

「うっそ…。まじで？」

「まじで！空手を始めたおかげで、強くなれたしイジメも無くなった。仲間も友達も出来た。お前があの日、助けてくれたから、強くなりたいうって思うきっかけをくれたから、今の俺が居る。」

だからあの日、お前に声掛けしたんだ。

中学入って、すぐにお前に気付いた。あの時のあいつだって。でも同時にショックだった。俺を助けてくれた奴が、一人ぼっちだなんて、どうしても放つとけなかつたんだ。

あんな不良に係わんとか言われたけど、お前を救えんの俺しか居ないって思ったからさ。何かえらそうだけど…恩返しつて奴。」

友也が俺の肩を軽く叩いた。そこから熱い鼓動が、俺の全身に優しく広がった。

「…全国、絶対勝てよ。絶対応援行くから。」

「当り前だろ。任せとけ！」

この口約束は絶対守る。破る訳にはいかない。俺はそう、心に誓つた。

戻れない場所

福島刑務所 Y・T

北海道の小さな港町の春は遅い。三月も半ばを過ぎたというのに小雪がちらついていた。

その日、終業式だった私は通信簿を握りしめ、家路を急いだ。ずっと苦手だった数学の成績が五に上がり、誰かに報告せずにはいられたかった。

共働きの両親の会社に電話して話すつもりだった。

玄関に入ると、父の靴があった。ちやうど昼に差しかかる刻だ。昼休みで戻って来ていたのだろう。私は早速、鞆から通信簿を取り出した。どんなやり取りがあったのか、はつきりとは憶えていないが、満足そうに目を細めてくれたのだけは、今も網膜に焼きついている。

程なくして、父は再び会社へと戻って行った。

晩ご飯は何だろうな、コロ（飼っていた犬）の散歩にいけよ、そんなに遅くならずに帰るから：何てことない言葉を残しながら。

しかし、父は帰って来なかった。次の日もその次の日もだ。ずっと帰って来なかった。

母はその夜、一睡もしなかつたようだった。父が帰らないことを不安に思うのか、目は充血、一晩にしてやつれてしまった印象だ。母によると、父、本人からは尚のこと、どこからも誰からも連絡がないという。会社に電話しても、業務は終了したと録音の音が繰り返すだけ。

それが一変したのは、一夜明けた翌日の午後だった。何の説明もないまま、同じ市内に住む祖母の家に連れて行かれた。ほとんどの親戚が集って

いたが、盆暮れのそれとは全く異なり、みんなどこかよそよそしく、苛立ちだったり、やり場のない悲しみを必死に隠そうとしているように見えた。

母もまた同様だった。平然を装ってはいるが、時折、涙声で顔が歪む。それでも、「よく聞きなさい」と前置きした上で、気丈に語り出した。

父は仕事の都合で転勤になり、しばらくは帰って来れなくなったということ。

そして、何故か、残った家族―母、私、弟が遠く離れた街に引越すということ。しかも、新学期が始まるまでの、わずかな春休みの期間に。

当然のように疑問符ばかりだった。何も知らない子供とは言え、なんで？ どうして？ のオンパレード。だが、そう口にするのは憚られた。母をはじめ、どの大人達の顔にも、何も聞かないでくれと書いてあった。

夕方になった頃、祖母の家の二階から下りて来た、まだ幼い頃が「おじさんが新聞に載っているって」と無邪気に教えてくれた。漸く掴めそうな糸口に、私はすぐに階段を上がった。そこには伯父、伯母らがいた。何かを囲んで肩を寄せ合っている。

「お父さん、新聞に出ているんだって？」

私が問うと、揃って慌てふためき、囲んでいたものを覆い隠し、「いや」とみんな目を逸らせるばかりだ。嘘をつくのが下手な人達だと思いつつも、小さな頃から聞き訳の良い子として育った私は、敢えて嘘を嘘だと言わなかった。ただ、何やらただならぬ事態が発生しているのだということだけは察した。

そこからは、あつという間だった。

春休み中であつた為、クラスメイトには、さよならもありがとも言えなかった。いや、仮に休み中でなくても、言えなかつただろう。ひっそりと引越す仕度、夜逃げ同然で荷物を積み、住んでいた家が空っぽになるまでにそう時間はかからなかつた。

父が帰らなかつた日から五日後、私たち家族は住み慣れた海の町を離れた。国道から見える海は、重い灰色の雲を反映して、図画用の鉛筆で塗りつくされたように黒かつた。

これからどうなるのか。文字にしたら簡単な文字だが、実際には筆舌につくしがたいほどの想いだつた。運転する母だけは、新居の間取りなんかを話していたが。

こうして新生活が始まつた。

幸いなことに、祖母や親戚が金銭面を中心に援助してくれていた（後に知つたことだが）こともあつて、何不自由ない暮らしだった。毎週のように親戚達が代わる代わる遊びに来てくれて寂しさも感じず、転校した学校でも友達ができ、父がいけない以外、それまでと、さほど変わらない生活をしていった。

そんな生活が軌道に乗つた頃だ。母が、父から手紙が届いたと言つて見せてくれた。差出した住所が記されているであろう封筒は決して見せようとはせず、便箋一枚だけだ。

急な仕事で会えなかつたが元気か。受験勉強は捗っているか。

身体には気をつけるように。

少し癖のある文字。所々滲むインク。そして片隅に押された、桜を象ったスタンプ。

私は、手本のような返事を認めた。

元気でやっているよ。

学校は楽しいよ。

仕事が終わったら早く帰って来てね。

最初のうちは月に一度、少し経つと月に二度、いつからか毎週、手紙が届くようになった。飽くまで、父は仕事で遠方にいる。とは言え、南極調査隊でもあるまいし、電話一本できないなんてあり得ない。私は、真実が何であるか、薄々思い当たっていた。

その「真実」が、実際に私の心に突き刺さったのは、高校二年の時だった。

文化祭の準備で、図書室で調べものをしていた際…。偶然、新聞年鑑なる分厚い本があることを知った。過去十年以上に遡って、一日一日、新聞の縮小版が綴られている。その時は、まだ心の中で覚悟が出来ていなかった為、その場を離れた。それでも、知りたかった。

ある日の放課後、意を決して、再び図書室の椅子に座った。父が帰って来なかった年月日は忘れる筈もない。私はページを捲っていった。何か載っていたらいい。いや、何もないほうがいい。でも、あの日、伯母らがわざとらしく隠した新聞が思い浮かぶ。

果たして、父の名前はあった。想像していたよりも小さな記事だったが、「容疑者」という肩書きが付いていた。逮捕、警察、送検。聞き馴染みのない、まるで現実味のない単語が目につく。

周囲の音が遮断された気がした。自分だけがそこに浮かんでいるみたいで、足に力が入らない。いくら予期していたとは言え、いざ現実を目の当たりにすると、激しく動揺してしまう。こんなもの見なければ良かったと後悔に苛れる。

その夜、母に打ち明けた。それまで通り、知らないふりでも考えたが、知ってしまった以上、今までみたいに「仕事頑張ってる」とは手紙に書けない。

母の顔は、見る見るうちに、悲しげに曇った。が、どこか吹っ切れた面持ちで「いつかこんな日が来ると思っていた」とも言った。

父が事件を起こしたことは、警察署から連絡があったらしい。その瞬間、頭を過つたのは、父のことでも、被害者のことでもなく、私と弟のこれからだと言おう。もちろん、被害者をなおざりにした訳ではない。ただ何よりも一番に子供を守りたかったと、この言葉を吐き出す時には、母の目は真っ赤だった。

そっか。その時は、それ以上聞く気にはならなかった。

歳月は過ぎて、私は大人になった。そして今度は私が逮捕された。いつしか父を憎むようになっていた私は、手錠をかけられた刹那、父に対して仕返ししてやったという気持ちがあった。あんたがもたらした苦しみと同じ苦しみを与えてやると。その父の手紙が届いた。拘留所の独房で一人膝を抱えていた時だ。やはり黒い花片の押印があった。

—俺は何をされてもかまわんが、母さんだけは泣

かせるな。母さんの苦労はお前が一番分かっているだろう—

そうだった。母は、私達を必死に守ってくれた。後ろ指をさす世間から、父親が起こした事件から。何年も経ってから知ったことだが、言われのない中傷や、脅迫まがいの電話もあったらしい。母自身もどんなに不安だったか想像できない。なのに、これらのことを話す時は笑い話に昇華させていた。

私の居場所が失くならないように。私の居場所がずっと穏やかであるように。母自身の苦しさ辛さなどおくびにも出さずに、ただただ守ろうとしてくれた。どんな時も、私の居場所を守り抜いてくれた。それなのに、私は己れの弱さを父のせいにして、母の思いを踏みにじってしまった。何度も何度も…。

自分から背を向けたくせに、恋しくて、懐しくてたまらない場所。目を瞑れば鮮やかに思い浮かぶのに、目を開くと儚く消えてしまう場所。あの頃の私の居場所はもうどこにもない。

居場所

盛岡少年刑務所 K T

一人ぼっちになりたくない。

幼少期に両親が離婚し、母子家庭で育った私は、そんな思いがいつも心のどこかにありました。小学三年生になる頃、母の再婚相手となる人が私の住んでいた家で一緒に暮らすようになり、母は私のことを邪魔だと思っているのではないかと思うようになり、少しずつ家の中に自分の居場所は無いと感じていました。

そんな私がつた行動は、学校で同級生をいじめたり、先生に反抗することを目立ち、母の気を引くことでした。私がか何か問題を起こす度に母は学校に呼び出され、私の為に先生に頭を下げ、家に戻れば私の行動を論し、怒ってくれました。そんな時は、私はここに居てもいいのかなと感じるようになりました。

しかし、そんな行動を繰り返している内に、母は私に何も言わなくなりました。その時、もう家には居場所が無いと思い、小学五年生の時に家出をし、児童自立支援施設で暮らすようになりました。

「母に見捨てられた」。

そんな風に思っていた私は、それからどんどん荒れていき、気に入らないことがあればケンカをし、周囲は全部敵と思うようになり、それでも一人ぼっちになり

たくないという思いが心にあった私は、暴力と恐怖で周囲に人を置き、居場所を作るようになりました。中学生になってからも同じような方法で自分の周囲に人を置き、そうしていく中で、自分と同じような境遇で非行や犯罪行為をしている集団と知り合い、この不良交友の中にも居場所を築いていきました。

そして、それまで生活していた児童自立支援施設が嫌になり、脱走という形で施設から逃げ出し、不良交友のたまり場になっていた家で生活をするようになつた頃、ある事件を起こしてしまい、中学三年生で私は逮捕され、警察の留置所に入ることになりました。留置所での生活が始まってすぐに母が面会に来てくれました。その時、母は私の前で涙を流していました。その後、鑑別所に行つてからも、母は何度も面会に来てくれて、「また一緒に暮らそう」。

と何度も言ってくれました。しかし、保護観察の処分を受け私が戻ったのは、不良交友達の中に築いた居場所でした。母の元に戻らなかつた理由は、小学生の時に家の中に居場所が無くなり、辛い思いをした経験があつたからです。また家に居場所が無くなり辛い思いをするくらいなら、自分が築いた居場所に居れば、傷つくことなく、一人になることも無いと思つたからです。

不良交友の中に戻つた私は、逮捕される前と変わることに無い生活を送り続け、非行や犯罪を繰り返していました。当時の私には、そうした行為に対する罪の意識は無く、自分の居場所を失わない為、また一人ぼっちにならない為の行為でした。

そんな日々を送っていると、いつしか私の周囲には反社会的な組織の人が増えていき、私もそうした組織に足を踏み入れられるようになりました。少しずつその組織が新たな居場所になりつつあつた頃、二度目の逮捕となり、少年院に行くことになりました。その時も、母は私の元に面会に来てくれて、

「いつでも味方であるから、早く帰つておいで」。

と言葉を掛けてくれて、手紙も沢山送ってくれていました。しかし、当時の私は、その言葉や手紙の内容を素直に受け入れることができず、少年院を出てからも、再び元居た居場所に戻つてしまいました。その頃の私の居場所は、完全に反社会的な組織の中になりました。少しずつ少しずつ、私の周囲に居た仲間と思つていた人が離れていき、変わりに組織を居場所としていた人達が、私の周りに増えていきました。組織だけが私の居場所であり、ここに居る限り一人ぼっちになることはない、逆に組織を離れれば私は居場所を

失い一人ぼっちになってしまおう、そう思っています。

そんな組織に依存している時に、今回服役するきっかけとなる事件を起こしてしまい、今こうして刑務所の中で生活しています。しかし、まだ母は私を心配し、「いつでも戻ってきなさい。」

と毎月のように手紙をくれます。心のどこかでは分かっています。母はいつも私の居場所を作り、待っていていました。

服役生活も四年以上が過ぎた今、過去を振り返り、このまま同じような居場所に戻ってはいけなさと、強く感じています。今まで好き勝手に生き、罪の意識を持たずにいた私が、刑務所の中の生活で多くのことを考え、学び、大切なことは何で、本当の自分の居場所がどこなのか分かりました。大切なことは、相手のことを考えること、そして人を信じることです。

私はそれができず、視野が狭くなり、すぐ近くにあった本当の居場所を見失い、間違えた方法で居場所を作ってしまった。私を信じ、いつも心配してくれていた母こそが、私の本当の居場所です。そこを居場所にできなかった理由も、私の勝手な思い込みで、母のことを信じることができなかったからです。居場所がないなんて思い込まず、素直な気持ちを持

つことができているなら、今このように刑務所の中で生活することもなかったと思います。過去を変えることはできない以上、これから先の人生で、今まで犯してしまった罪をしっかりと償っていき、そして私の居場所をいつも作ってくれていた母の為に、一日も早い社会復帰を目指し、更生の道を歩んでいこうと思います。



【選評】——課題文——

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県芸術協会会員

原 田 勇 男

課題文のテーマは「居場所」。九州男さんの『繋がる場所』が出色でした。筋書は不良少年だった私は、クラスの中で孤立していました。ある日、小柄な友也が私に空手をやらなにかと話しかけてきたのです。最初は断りましたが、自分と闘ってお前が勝ったら空手をやらなくてもいい、逆だったら空手をやるという条件でした。結果はボロ負けで空手をやることになりました。

私は空手にのめりこみました。初段になって全国大会の予選が近づいたとき、右足の膝が痛くなり、骨肉腫と診断されました。生きるために足を切断する手術を受けました。見舞いにきた友也に「なぜあの時俺に

声をかけた？」と聞くと、友也は昔いじめられていた時にお前が助けてくれた。だからひとりぼっちのお前を助けるのは俺しかいらないと思つたと打ち明けました。心温まる話です。

Y・Tさんの「戻れない場所」は、父の罪を知らされないまま育つた少年が、ある日父が刑務所に入っていることを知ります。それまでは母が居心地のいい居場所を常に用意してくれていたのに、父の事件を知り自分も罪を犯してしまう数奇な運命によって、その居場所に戻れなくなつたと感じていきます。しかし、罪を償って母の元へ帰り、再出発してほしいと切に思います。

K・Tさんの「居場所」も不良少

年になり、罪を犯して服役している方の文章です。今では罪を償って、母が用意してくれる居場所から社会復帰をしたいと更生の道を歩んでいきます。彼の人生はまだこれからです。

《自由文》

客待ち

福島刑務所 Y・T

かれこれ一時間は経過している。十数分置きに新幹線が到着するが、シーズンオフの今は客足は疎らだ。客待ちのタクシーが減らないのも仕方ないだろう。俺は、ワイパーでフロントガラスの雨を拭った。途端に、また雨粒で埋めつくされていく。

ふと、先も目撃した老婆が見えた。駅の出入口の横にちよこんと立っている。白髪頭に着古した感のある黒い外套。少し丸まった背中。連れはないようだ。

観光客ではない。仕事がらみでもなさそうだ。誰かを待っているのか。それにしても、周囲に目を向けることもなく、寧ろ、それらから顔を背けている雰囲気すら漂う。

前のタクシーが動いた為、俺はアクセルを軽く踏んだ。雨はまだ止まない。乗車しそうな客もない。舌打ちしかけた矢先だった。

老婆が俺のタクシーに近づいてきた。ゆっくりゆっくりと、前に前にと言い聞かせるような足取りだ。

俺は後部座席のドアを開けた。

ここで老婆は一瞬だけ躊躇いを覗かせたが、すぐにシートに身体を滑り込ませた。

「ご乗車ありがとうございます。どちらまで行きたいですか」

雨に濡れた髪を気遣い、ヒーターのつまみを一つ動かしながら俺は聞いた。

だが、老婆は黙りこくったままだ。ミラー越しに様子を窺っても、視線が合わない。頭頂部が微かに震えているのが分かるくらいだ。

あの…、あの…。

ヒーターのノイズに掻き消されそうな声が俺の耳に届くまでは、更に数秒要した。しかし振り返っても、その続きは発しない。

俺の脳裏に、ある言葉が蘇った。いつだったか、先輩ドライバーが洩らした言葉だ。

あの駅で客待ちをしていると、時々、妙な客を乗せることがある。行き先も何も告げずにただ俯いているだけ。そこにいることがあたかも申し訳ないかのように、ただただ心細げに座っているだけ。はじめは戸惑った。でもどこに行きたいのか気づいた。実際に車を走らせた。その客は無言で礼を言うと、足早に降りて行った――

俺は、静かに車を出した。

駅前こそリゾート地らしくそこそこ賑わうが、信号を二、三越したら、もう木立ちの中だ。人影もなく、背の高い樹々が雨に打たれる景色だけが続いている。老婆は一言も喋らないが、降りるとも止めろとも言わない。

やがて、目的地――この時点では俺が決めた――に到着した。

森の中に突如として出現した要塞の如く佇む建物。俺の車を護送車が追い越していく。奥のコン

クリートの四角い建造物の窓には、鉄格子が張り巡らされている。受け付けには物々しい装備の刑務官が塀の外にも目を光らせている。

「お客さん、こちらで間違いありませんか」

俺の声に、老婆は外を一瞥した後、支払いを済ませ、刑務所へと吸い込まれて行った。

俺は老婆の帰りを待った。頼まれた訳でも約束した訳でもない。が、あの調子だと雨に濡れるのもいとわずに歩きかねない。そんな心情を慮るとこのまま引き返すことはできなかった。

雨は本降りになって来た。ワイパーが忙しない等間隔で雨を払いのける。

俺は再び先輩の声を思い出した。

―だけど、あの人は何も悪いことをしていない。夫なり息子なりが罪を犯して、その為に刑務所まで面会に行く。どんな想いで、タクシーに乗るんだろうか―

老婆は行き先さえ告げられなかった。顔も伏せたままだった。いや、それどころか、タクシーに乗るまでの一步を踏み出すのでさえ迷っていた。

しばらくして老婆は戻って来た。短くクラクションを鳴らすと、驚いた表情を遠慮がちに見せた。「どうぞ。駅まででよろしいですか」

軽く頷いただけで、やはり老婆は固まったままだった。俺も何も糺さず、淡々と車を走らせた。

それから一カ月後、老婆はまた現れた。出入口付近で止まってしまふのは前回と同じ。冬の都合いが進んだせいで、マフラーと毛糸の帽子に身を包んで、目元がほんの少し見えているくらいだが老婆に間違いなかった。

俺は自分から声をかけた。

「お客さん、良かったらどうぞ」

一カ月前の運転手だと分かっているのか、きよんとんとして頭を下げる老婆は乗車すると深くうなだれた。

刑務所までの道程は二〇分ほどだ。窓の外に目をやるでもなく、何か話すでもなく、ひたすら苦しさに耐えているようである。こちらから話かけるのも気が引けた。だいいち、何と話しかけたらいいというのか。

重苦しい空気のまま、車は到着した。老婆が降りようとすると、その少し先に幼子を負ぶった女性が目についた。背中の幼子が愚図っているのをあやしなから歩いている。

この母娘も面会に来たのだろうか。

老婆は少し間を置いて出て行った。

俺はこの日も待つつもりでシートを倒し、ラジオをつけようとした時、老婆が受付所のドアから顔を出した。皺くちやの顔が、悲しみを含んでいるのが分かる。時間にして五分も経ってない。

俺は慌てて、かけ寄った。

「どうした、ばあちゃん。もう、終わった？」

「ううん」

俺の言葉にはじめて反応を示した。

「どうした？」

「面会できんって。あれがチョウバツっちゅうもんになったって」

ああ。先輩が言ってたっけ。

せつかく遠くから面会に行っても、刑務所の中

で何か悪さをして懲罰を受けていた場合全く会えずに帰されるって。

遠くの一点を見つめる老婆は、深呼吸しながら気持ちに折り合いをつけてるようだった。茫然とすぎて、思わず懲罰云々と発したが、また元の無言に戻ってしまっている。

老婆が落ち着いた頃を見計らって、駅まで送り届けた。

その後は、毎月はじめ、俺は老婆を乗せた。春になっても、夏になっても、黒っぽい重たい印象の身なりだった。

何度目かの時、頭陀袋を持っていた。持っていたと言うより、引き摺ると言ったほうがいいだろう。中には角張った重いものが入れられているのが分かる。差し入れる為に、長い道のりを引き摺って来たのだろう。端っこが擦り切れている。その帰り道には、無造作に畳まれた袋だけが老婆の手にあつた。

そうして、老婆と出会ってから、三度目の春。

陽射しがだんだん和らいで、桜の蕾が今にも綻びそうになっている。そんな四月の十日過ぎ、老婆が現れた。月初めに老婆を見かけなかったから気になってはいたのだが、このタイミングで来るのは珍しい。

と言つても、すぐに気付いた訳ではない。いつもの黒ではなく、薄紅色のワンピースに身を包んでいるせいだ。サイズが合っていないのか、だぶついて見える。

もう一ついつもと違うことがあつた。いつもの駅の出入口でまごついて、俺から促さないとタ

クシーに寄って来ないが、この時は俺を見つけると、ゆつくり近寄って来た。

俺は老婆を乗せ、車を走らせた。

バックミラー越しに目が合う。これも初めてだ。よく見ると、白髪に櫛を入れてるようだ。うっすらと化粧もしている。今までこんなことはなかった。それがこの日は表情もどこなく晴れやかだ。

「運転手さん」

不意に俺は呼びかけられた。

「今まで、ありがとうございます」

消え入りそうに震えた声だったが、確かにそう聞こえた。

「この服、あれが昔、買ってくれました。わたしもやせてしまつて合わなくなつたけども、どうしてもこの服着で、あれを迎えに来たがっだ。初めての給料で買ってあげた服だから」

「とつても、似合ってますよ」

老婆は人懐っこい笑顔を見せた。

こんな面白い笑顔してたんだ。よかつた、笑いかたを忘れていなくて…。

刑務所に着いた。老婆を乗せて、ここに来るのもこれで最後だろう。

「ここでお待ちしています」

老婆は春の中へ歩いて行った。

どんな顔で戻って来るのか。待ちに待ったこの日をどんな思いで迎えたのか。

もう俯かなくていいんだよ。

俺は心の中で呟いた。

元受刑者としてこれから生きる

福島刑務支所 Y・K

「罪を償う」とはどういう事だと思いませんか考え方も償い方もそれぞれで十人十色だと思います。

「刑期が終われば罪を償った」という考えの人が大半だと思えます。私もその中の一人でした。私の考えが変わったのは一年半程前でした。変わったというよりも現在を受け入れ考え始めたという方が正しいかもしれません。

現在私は二年程刑に服しています。今思い返せば、入所当時は本当に態度が悪く、反抗喧嘩などで工場も一月もたなく、また生活面でも事件の事など考えようともせず、本当に何をしに来たんだと思う位ひどかったです。

入所したての頃は捕った事ですら納得していなかったし、強制的に連れてこられたからしようがなく生活しているという感じでした。行動も言動も考え方もその辺にいる中学生並でした。中学生以下かもしれない。「行け」と言われたから来ただけ。反省って何を反省するのかわからない。反省する事が無い。連れてこられた意味が分からない。「自分を変える」などもってのほか。そもそもそんな事頭にもなかったし、「自分は悪くない」と開き直っていました。あの頃の自分に「お前は何様や」と言っただけです。

そんな私でしたが考えや自分を見つめ始めたのが一年半前でした。きっかけは介護の職業訓練に選んで頂いた事です。今だになぜ選んで頂いたの

か分かりません。なぜかという募集告知があった頃、私は罰明けで工場も変わり、ふてくされ就業態度や担当の先生職員に対しての態度も悪化していました。募集があった時すぐに応募したかったです。さすがに悩みました。罰明けの上、態度も悪い。応募する資格はあるのか。締め切り直前まで悩み、やはりこんな私でも人の役に立ちたいという思いが勝ち、選ばれない覚悟で応募しました。介護の職訓は応募する人が多いらしく、そして私は罰明けの身。確率は少ないとわかっていても選ばれなかったらそれはそれでショックだから覚悟が必要でした。数週間後私は呼ばれてそこには幹部の先生がいらっしやいました。頭をよぎったのは「私何かした？」でした。「訓練生に選ばれました」それ以外の言葉は頭に入ってこず、しばらくの間放心状態でした。嬉しさのあまり泣いてしまい、それと同時に変らなければいけないと思う様になったのを今でも覚えています。ただ持っているだけの資格で終わらせたくないのです。必死で勉強しました。ある時、幹部の先生とお話する機会があり「約100人の中から選ばれたんだ」と教えて頂き本当に驚き、担当の先生を裏切っただけはいけないと気が合いました。そして自然と過去と向き合う様になりました。社会での生活を思い返し、事件と向き合い、今何を考え何をすべきなのか。出所後はどうすべきなのか。考えては悩み答えを出して、又悩みを今も繰り返しています。何が正解で何が不正解なのかわかりませんがただ一つだけわかっている事があります。「二度と犯罪に手を染めない事」もしも、又刑務

所に来る様な事があれば今まで考えてきた事やしてきた事が全て水の泡になるし、周りの人間からすれば「口だけの人間」で終わってしまいます。刑務所に出入りしていると威張ってる人がたまにいますが、個人的には何が格好良いのかわかりません。工場にはいいお手本が沢山います。私はそんな人間には絶対なりたくないです。過去を振り返る事で自然と事件の事を考え始め、そして今では過去の自分・現在の自分・これからの自分に対して考え方が少なくとも入所時とは変わったのではないかと思っています。

今春にも別の訓練生に選んで頂き、今は合格している事だけを祈り「私はまだ変わる」と思いながら生活しています。決して現状に満足せず、良い方に変わりながら出所の日を迎えたいと思っています。出所したからといって気を抜くつもりもありません。人間変わろうと思えば果てしなく変わり続けられると私は思っています。

私は出所したら西日本豪雨の被災地に行こうと考えています。正直お金に余裕がある訳でもないし、すぐ働いてお金を稼ぎたいですが、何の罪もない方が家を失い暑さや空腹に耐え、そして身命を亡くし、精神的苦痛を受けている。私達はどうでしょうか。被災はしてないけれど「受刑者」である私達が布団で寝れて三食きちんと食べさせてもらって入浴もさせてもらっています。お金も得られています。自由はないけれど、それは自分がまいた種であって、衣食住の面では困まっています。犯罪者なのに。ニュースで被災者の方が「ダンボールベッドが届いてありがたい」と涙ながら

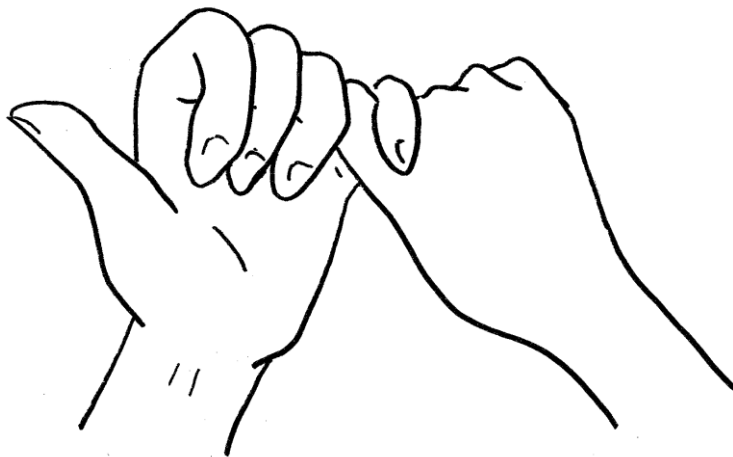
に言っていたのを見て本当に心が痛く自己嫌悪に陥りました。そして今の身分で今の環境がどれだけありがたい事なのか考え、入所時「連れてこられたから生活している」と考えていた自分が腹立たしいです。

ニュースで色々な災害や事件が取り上げられる度、そして自分が訓練生に選ばれて環境が変わるにつれ色々考えさせられ、「自分なりの罪の償い方」も変わる様になりました。償いとは刑期を終える事ではないと思います。刑期は国が決めた裁きであり、刑務所は自分を見つめ直し二度とあやまちを犯かさぬ様勉強する場所です。私は自分と向き合い受け入れるのに一年かかりました。けれど受入れる事によって色々考え、視野も広がり少しずつ前を向いて進める様になりました。

次は「償い」です。償いは出所してからする事だと思いません。私の償い方は出所して人の役に立ち後ろ指をさされず、自分を甘やかさず自分から逃げない本当の意味での「社会復帰」が被害者に対しての償いだと考えています。つまり、出所はゴールではなくスタートだと思えます。刑務所は、出所というスタート地点に立つ為の反省する通過点でしかなく「償いの場」ではありません。

刑務所に入ってしまったらもう終わりだと良く聞きますが人生に終わりとか無いと思います。あるのであればそれは命が尽きる時であり、底などない。一年半前から考え思っている事があります。少し言葉は悪くなりますが、「捕って刑務所入った事でこれをバネにしてやり直すか、落ちる所まで落ちてクソみたいな人生を送るか二つに一つ」という

事です。私は前者の方です。償いは出所後からする事でまず現在を見つめ、自分と向き合い受け入れて出所というスタート地点に向って前に進む事です。そしてスタート地点に立つて本当の社会復帰が出来てやっと罪を償えたといえると私は思います。こういう考えが出来る様になったのも担当の先生や職員のおかげです。今まで言ってきた事やこの作文がキレイ事で終わらない様にもっと自分と向き合いしっかり考えて生活し、一日でも早くスタート地点に立ち時間がかかってても罪を償いたいと思います。刑務所に入ってしまったのは人のせいではなく自分のせいです。私達「受刑者」は一般の人よりは人一倍遅れています。罪を償い一つも遅れを取り戻し、早く人並みの生活をしたいと思います。過去は変えれないし、消せません。でもこれから変えようと思えば変えれます。決して現状に満足せず償いながら、前を向いて生きていける人間になります。出所してからも考え方を忘れず少し自信を持ってこれから生きてゆきたいです。



自分の人生に専念する

福島刑務支所 E・K

私は七〇才を過ぎ、高齢者となった今もまだ手さぐりの人生でいるのです。

このままで残りの人生を終わらせたくないという思いに馳せて、自分の人生に専念するという事を改めて考えてみました。

目の見えない盲人さんなのに歩いていてもめつたに怪我をしない。目の見えるの方がむしろ石につまずいたりして、よく怪我をする。それは目が見えるために油断をするからであり、目の見えない人は、手さぐりで歩き一步一步が慎重だからであり、一歩進むために、全神経を集中するからでしょう。

私はこうした目の見えない人の真剣な歩き方を思い、人生で思わぬ怪我をしたくなければ、そして世の中でこれからはつまずきたくなければ、目の見えない人の歩み方を見習う事だと考えたのです。

人生を真剣に考える事、命をかけてでも、人生に対して、真剣勝負で取りくまなければならぬと思つたのです。

これ迄の人生では失敗ばかりでしたが、その都度、なんとかなるさと、軽い気持ちでいた事を、なんと呑気にかまえていたのだらうと、自分の愚かさを、七〇才をとくに、超えてから思い知り痛感しているのです。

でも過ぎ去った事を愚痴ることより、人を頼つ

たり、他をあてにする心をいさぎよく払いのぞき、これからの人生をどう生きるかを考えるべきと思つているのです。

それには志を立てること、本気になって、真剣に志を立てて、この様な、過ちを犯すことのないように、しっかりと、自分の人生を見つめ直し、出所後の人生をどう生きるかを、考え薬物から離脱した人生を全うできる自分になる様に人生に専念するという覚悟で、この受刑生活を送り自分を知らぬという事は、むつかしいけれど、自分を知らなかつたら、自分に敗けてしまう事だし、自分を知る心がけをどんな場合も失ってはならないと気づいたので。

もう一度人生のやり直しをするためには、心がまえをしつかりと確かめて自分の人生に専念して、真つ当に生きて行くことだと思つているのです。人生に専念するという事は、志を立てることであり志を立てるのに老いも若きもないと確信しているのです。

過去の私は何度も道を失い挫折をしました。それは自分が立てた志に弱きものがあつたからだ。今は、そのように思えるのです。このように過ちを繰り返す前に何故もつと早く人生に専念するという大事なことに気づかなかつたかと。気づいていれば過ちを繰り返すこともなく受刑の中でたつた一人の我が子を亡くすることもなかつたであらうかと心が痛むのです。我が子を失つてから我が子の大切さを知る愚かな自分であり自分の身近に何か起きなければ理解できない愚者であり我が子を失つたことでこの先どう生きて行くか、この辛

さをどう対処すべきかも分からずに試行錯誤もしましたが、人はそれぞれ業を背負いて、生きて行くものであり、人は皆な生まれた故郷の土に帰るものだと自分に言い聞かせて、亡くした我が子の事はかけがえのない想い出として胸深くきざみ込んだのです。人生は大切な一生であり、尊いのが人生だと、思えるのです。

私はわからない世の中をわかつたつもりで歩んで来た結果が過ちの繰り返しでしたからこれからは、わからないことは皆んなに教えてもらい謙虚に物事を真摯に受けとめて手さぐりの人生から前進しなければと思つているのです。

「人生七転び八起き」ということわざがありませんが、今の私はこのことわざがとてもありがたく思えるのです。でも七度転んでも八度目で起きればよいと、呑気な考えでは駄目と思うのです。一度転んで気づかなければ七度転んでも同じことだと思つので一度で気づく人間でなくてはと思ひ私はそういう人間にならなければと思つているのです。

転んでもただで起きないように真剣に人生を送らなければと思つているのです。人生に専念するという事でこれからは誤りのない生き方をするため素直な気持ちで自問自答を繰り返して残りの人生を悔いのないように人生を全うして行けるよう人生に専念して行きたいと思つているのです。

【選評】—自由文—

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県芸術協会会員

原 田 勇 男

応募数十三篇。その中で、Y・Tさんの小説「客待ち」に心打たれました。駅前でタクシーに乗ったみすぼらしい身なりの老婆は車の後部座席に乗ると、行先も告げずに俯いていました。運転手はふと先輩ドライバーが漏らした言葉を思い出し、どこに行きたいかを察しました。老婆は森の中の要塞のような建物に入りました。窓には鉄格子が張り巡らされ、受付には刑務官が見張っています。

その後タクシーの運転手は時折老婆の送り迎えを繰り返すようになりました。ある春の日、老婆の方からタクシーに近づいてきました。いつもは黒い衣装なのに、この日は薄紅色のワンピースで身をつつんでいました。笑顔でうつつらと化粧までしています。「今までありがとうございました」と運転手に礼を言う老婆。今日は出所日のようです。簡潔な表現で刑務所に通う受刑者の年老いた母親の姿とその心情を巧みに描いています。随筆ではY・Kさんの「元受刑者としてこれから生きる」とE・Kさんの「自分の人生に専念する」を選びました。Y・Kさんは介護の職業訓練生に選ばれたのを契機に、自分を変える生き方に目覚め、E・Kさんは七〇歳を過ぎて悔いのない人生を送ろうと決意しました。二人の決断を評価し

ます。他にペガサスさんの「はるかな道を夢に向かつて」、T・Dさんの「親父」、H・Nさんの「責」とは、I・Sさんの「擬態」に注目しました。

《読書感想文》

“手紙”を読んで

盛岡少年刑務所 濱乃白影

「あなたに夢はありますか。その夢は叶いそうな目標ですか、それとも…」

私がこの本を初めて手に取り、食い入る様にして徹夜で読破してから数年が経ちます。

思い返せば、16歳の冬からこの本は、節目節目折り返しに読んで来て、もう数十回は手に取っているのですが、決して色褪せる事なく読む度に深く考えさせられますし、毎度違う気付きがある作品です。

そもそも私がこの作品を手にしたのは、著者の東野圭吾のファンであった私に、当時入所していた少年院の先生が勧めてくれた事がきっかけです。内容も分からず手に取った私には刺激が強過ぎて、何度も手を止めたくなつた程でしたが、それでもページをめくる手を止める事はできず、胸の苦しき心の痛みに耐えながら、気付けば一息のものと読破してしまいました。

物語りは、夢を追い続けた弟と、その弟を想うが故に大罪を犯し、弟の人生を辛苦の渦に巻き込んでしまった兄、そして、彼らを取り巻く冷たい世間や隣人と、暖かい友人や恋人によって構成されるヒューマンドラマです。

弟の進学費用を工面する為に、悩み苦しんだ末に兄が取った行動はドロボウでした。しかし、帰

宅した住人と居合わせてしまった彼は、焦りと恐怖心から通報を阻止しようとしたはずみで、住人を殺めてしまいました。

強盗殺人罪。弟想いの真面目で優しい兄が犯してしまった罪は、過程や動機を推し量つてもなお重大過ぎる罪でした。

当然の事ながら兄は長期間の服役を課され、弟は進学を諦めて、夢への道は閉ざされ、工場労働者となつて生計を立てる様になつたのですが、ここでも受刑者の家族というだけで肩身の狭い思いをし、兄からの一通の手紙によって彼が築いていた関係にヒビが生じて、彼は退職。遠地へと安住の地を求めます。

しかし、そう簡単な事ではなく、それから幾度となく彼は兄の存在によって辛酸をなめさせられる事になっていくのです。

愛した人との結婚。職場での出世。

兄の犯した過ちによって犯罪加害者家族となつてしまった彼は、正当な評価をして貰えないばかりか、ただそれだけで人間性をも疑われていき、ついには兄と縁を切るという決断を下してしまいます。

その後、良き理解者との出会いで多少なりとも人生は好転し、家庭を得て子を授かり、また新たな人生の決断を迫られつつ、人生をものがきながら生きていく彼の姿を描くというのが本作の粗筋です。

主人公は弟であり、弟の視点から語られていく本作を、私は自分にも弟がいる為、感情移入をせずには読めませんでしたし、私の弟も同じ様に私

の弟というだけで特別視され、地元ではどこに行ってもそのレットルが付きまとい苦勞をかけたと思うので、口に出して言われた事のない弟の心情を想い、胸の痛みを抑えることが出来ませんでした。

私はずっと「俺は独りで生きていく」と思い込み、「誰の力も貸らないで生きられる」と強がって、本当は何ひとつ独りじゃ出来ないのに我だけで過ごして来た気がします。金銭的に援助を受けていないというだけで自立していると誤解して、自立しているのだから何をするのも自由だと勘違いを重ね、本当に好き勝手な愚かであつたと、今更ながら反省している所で、また本作を手にとると、より一層その気持ちが増していくばかりです。

何も悪くない大切な弟が、私の弟というだけで辛い思いをし、苦勞を強いられるであろう現実を目を向けると、申し訳なささ情けなさで本当に心が痛みます。加えて、本作では兄と弟の二人家族という話ですが、私には父も母もいますし、祖父母や伯父伯母など沢山の親縁者がいるので、その人達にも同じ様な思いをさせてしまつていてと思うと、私の犯した罪はとてつもなく重大なものであるという事を思い知らされました。

では、本作を通して著者が読者に訴えているのは、そういった罪の広がり、重大さだけなのかと言われると、そうとも言いきれず、私は読む度に違つた想いを感じます。

ある時は、故なき批判による挫折からの立ち直りと、他者の支えや障害、外からの影響について考えさせられ、またある時には、人を想う気持ち、

人の在り方そのものについてを考えさせられる。

本作は読むタイミングや場所、状況、心の状態によって、本当に様々な景色を見せてくれるので、一度ではなく二度三度と読み込む事で、やっと理解したと言えるのではないか。むしろ一回読んだだけで分かった気になってしまうのは、愚かな事だとすら私は思います。

また、本作の細部に手を加えた同名の映画作品もあるのですが、これを見た後に原作の小説を読むというのも一興で、私は映像を後から脳に入れ、また文に戻ったので、頭の中で画像を浮かべられ、本当に鮮明な仮想体験をしている様な感じで、再び本作を読み込んでいけるようになって良かったです。

そして今、様々な追憶を経て持っている本作の印象を語らせて頂きますと、一言でいえば「ヒトの酷い本性と美しい情愛を描いている」と私は感じています。

弟を想うが故に他人の物を奪うという選択をし、身勝手極まりない行為に走った兄。彼のその純真な心。その為に他人を傷付けても構わないと決めてしまったのは、人のもつ酷い本性や手前勝手な保身の心の現れ。その行為は間違いない許されませんし、犯した罪はとても重大なものです。

しかし、彼からしたらそうせざるを得ない程の生活状況にいたのでしょうか、そういう状況を生み出す社会の在り方にも少なからず責任があるでしょうし、問題もあるのではないかと私は思わずにはいられません。

そんな彼を闇雲に非難し、排斥しようとする世

間の行いは、自己防衛からなる当然の成り行きなものでしょうが、私には行き過ぎたそれは暴力と変わらないと思います。ましてやそれを弟にまで向けて、必要以上に警戒し、それひとつをして彼を異分子の様に扱うのはどうなのだろうかと思わざるを得ず、世間のそうした過剰な反応が新たな悲劇を生んでいる事もまた事実だろうと思う所です。

犯罪加害者家族。確かに兄は許されない行いをしてしまいましたが、その弟にも同じ様に罪があると言うのでしょうか。

兄が自分の為に罪を犯してしまつた自責の念を抱えながらも、まっとうに生きようと努め、どれだけ世間の言われなき敵愾心にさらされても、社会に溶け込もうと耐え続けた弟。

私は、それが当然の事であると言われるのならば耐えられませんが、もうどんな顔をして弟や両親と会ったら良いのか、全く分からなくなりました。

私は今まで数え切れない程の過ちを犯し、罪を重ねて来てしまいました。沢山の人達を傷付け、身勝手な思考で無法的な振る舞いを繰り返し、私は本当に人間のクズだと言われても仕方ないと思つています。

ですが、弟や両親は決してそうじゃない。真面目に働き、愛情深く、社会一般にいう所の普通の社会人で、私にとっては胸を張って誇れる立派な人達なのです。

それが私のせいで迫害され、言われなき非難にさらされていると思うと、本当に申し訳なさで胸が一杯になり、「俺は一体何をやって来てしまったんだ」と自責の念と情けなさで夜も眠れなくなり

ます。

自分が何様になったつもりか身勝手な生活をして、大切に想っている人達の人生にまで傷を付けて、本当に私の罪は重大で、今後の人生をかけて償っていかなくてははいけないと改めて思われ、本作を読む度に、私は更生の意欲をかき立てられずにはいられません。

いつの日か、もし許されるなら「本当に今まで御免なさい」と、私の側から離れて行ってしまつた人達に心から謝りたいです。

収容者の身で本作を読むのは辛いものですが、本当に考えさせられる事の多い作品なので、是非多くの方に読んで頂きたいです。

「あなたに夢はありますか」

私の夢は、皆がまた笑つて暮らせる事。

「それは叶いそうな目標ですか」

私のこれからの努力で達成可能です。

「それとも：外圧で不可能になりますか」

いいえ。全ては自分の責任ですし、何事だろうと耐え忍び、絶対叶えてみせます。

「友罪」を読んで

福島刑務所 Y・T

もしも、親しくなった人が、過去に凶悪事件を起こした犯人だったら？それも、世間を震撼させた大事件ながら、少年法によって、僅か数年で社会復帰した人間だったら？

この物語はフィクションです。モチーフは神戸連続児童殺傷事件を思い起こさせますが、背景や登場人物、人間関係などは、全く架空のもので、私にも拘らず、現実感を伴って、私の心は深く抉られました。

私は、本作を何度も何度も読み返しています。ある時は物語のテーマ通り、今、目の前にいる人が凶悪犯だったらどうするかという視点で。また、ある時は、私もここまで残酷な事件ではないにしろ罪を犯して現在に至っているの、親しくなった人に過去が知られてしまったらどうするかという別の視点で読みました。

話は、ある工場の寮に、二人が同時に入寮するところから始まります。ジャーナリストを目指しながらも挫折ばかりの益田と、どこか得体の知れない無口な鈴木。たまたま同い年で隣同士の部屋というだけの間柄だったのが、次第に打ち解けあっていきます。

仕事に慣れて来た頃、ほんの不注意で益田は指を切断してしまふ。その際、そばにいた鈴木は夥しい出血に目を背けることなく、瞬時に的確に、切断された指を拾い上げ、応急措置を施しました。その甲斐があつて、益田の縫合手術は成功

し、回復に至りません。感謝しきりの益田でしたが、後日、事故当時のおぞましい程の画像を鈴木が所持していることを知りました。しかも、嬉々とした表情で第三者に説明までして。益田の胸にこの時初めて鈴木に対して嫌悪感が広がりました。

これと時を同じくして、益田の許に、ジャーナリスト仲間から、ある依頼が舞い込みます。昔の事件を調べてほしいと。そう、その事件こそが鈴木が以前犯した、残酷極まりない事件（本作では、「黒蛇神事件」と表記）だったので。

だんだんと核心に近づく益田と、それを感じ取りながらも、もはや「親友」として彼を信頼し切っていた鈴木。

鈴木の中の唯一の味方にして、監視役のかつての医療少年院の教官も、その危機を悟り、逃げるように指示するが、やつと自分の居場所を見つけた彼は頑なに拒むのでした。

益田もまた、真実に近づけば近づくほどに悩みます。

「もし、親友だと思えるほど親しくなった人がその犯人だったら？」と、事件調査を依頼したジャーナリストに問い質す場面があります。

「避けるに決まってる」

恐らく世間ほとんどがこれと同じ反応でしょう。十四歳で何人もの子供を残酷に殺している人間と仲良くできる訳がない。きつとそう言うでしょう。

「犯人の犯罪傾向は改善されているとしても？今は普通に生活していても？」

尚も食い下がる益田に、ジャーナリストは逆い

問返します。

「じゃあ、何人もの子供を殺した人間を許して、友達でいられるの？」

「わからない」と益田は答えました。

もう一人、悩む者がいました。鈴木をそうだと知らず愛してしまった女性です。

彼女にも過去がありました。過去から逃げるように息を潜めて暮らすけれど、逃げても逃げても追いかけてくる過去。

逃げなければならぬ苦しさを知っている彼女は、脛に同じような傷を持つであろう鈴木を受け入れるつもりでいました。その傷の正体を知るまでは。

私も刑務所にいる身です。何度目かの服役になります。社会に戻る前に度に、それまでの友人はすべて失くし、事件が知られていない土地を選んでやり直して来ました。今の刑が終わってからも、そうなるでしょう。それでも時として過去が甦ります。忘れてしまいたいのに許してはくれません。常に何かに怯えているような気がしました。

例えば新しい職場、新しい友人、新しいコミュニティ。世界は広いようで狭い。それに現代はネット社会です。名前を入力して、キーを一つ押せば、たちどころに過去の情報が、あれだこれだと尾鰭をつけて、いくらスクロールしても尽きないくらい出現します。そしてどこからか煙が経ち始めます。そのたび逃げて隠れての繰り返し。

「ぼくはあそこを出ていかない。ぼくにとつて大切なものがたくさんある場所だから」

鈴木言葉に、胸が張り裂けそうでした。

罪を犯した経験のない人は、自業自得だと糾弾するでしょう。

しかし、生きていかなければなりません。

生きていくというのはただ呼吸をし、そこに在るだけではない。時に笑って、時にはしゃいで、さまざまな喜怒哀楽を抱えながら生活してこそが生きるということだと思ふのです。もちろん、罪の大小に関係なく、日々の償いは言わずもがなですが。

そもそも償いとは何なのでしょうか。

本作に、益田らの同僚が登場します。一人やもめ風で、晩酌をちびりちびりやるのが唯一の楽しみという初老の男。

彼には益田くらしいの息子がいたという。暴走族の真似事をしていた息子は、無免許で運転中、小学生の列に突っ込み、三人の子供が亡くなった。息子は逮捕され少年院に入れられた――

故意に人を殺した訳じゃない。息子も深く反省しているようだった。だが、あまりにも結果は重大だ。彼は親として苦悩した末、家族をやめるという結論を出した。

息子が奪ってしまった大切な存在を思うと加害者がこれから家族として暮らしていくことに耐えられないだろうと。

これが彼の償いの仕方なんだと思います。でも、これが正しいのかと問われたら、分からない。ただ、ここに至った過程は痛いほど理解できるし、恐らく被害者やその遺族の思いも間違いないでしょう。

人の命を奪ったこともそう。命は奪わないまで

も誰かを傷つけたり、誰かに被害を蒙らせた罪への償いに正しいも間違いもない。簡単に答えの出しようのない、難しいものだと述べられています。

私はこの「友罪」という、果てしなくノンフィクションに近いフィクションを読んで、色々と考えさせられました。

鈴木という過去の凶悪犯に対しては、その時々からの心情でいくつもの思いを投げかけました。

あなたは本当に反省したのですか？

根無し草のような人生を一生続けますか？

これからも大切なものを諦め続けますか？

それだけのことをしたからと諦めますか？

即ち、これらは彼の心の鏡に反射して、自分の心に返ってきます。

同じ寮に入居していた同僚達に対しても言いたいことがあります。

真実が明らかになった後、彼らは口々に鈴木のことを罵り合い、けだもの扱います。目の前に現れたらボコボコにしてやる、どつかでのたれ死んでほしい……。

確かにあなたの方の同僚は、過去に決して許されない罪を犯しました。でも、入社してからは、真つ当に生きようと必死になっていたのを知っていますよね。それを認めてあげようとはしないのですか？消せない過去、その一点だけに焦点をあてて責めるのですか？

いいえ。これはあなた方だけの声じゃない。世間の総意なのでしよう。犯罪者に対する。だから、私は耳を塞ぎたくなったのです。

そして鈴木の本体を最初に見抜いた益田。

ネタバレになるので詳述は控えますが、あなたは最後にメッセージを送りましたね。私は、あなたがやったことは正義だったと信じています。

あなたも苦しかった筈です。鈴木と向き合うことは、自分自身に刃を突きつけるような行為だったのですから。

いじめに遭っていた同級生の自殺を防げなかった過去。勇気がなかったばかりに死なせてしまった命。もう二度と繰り返したくなかった。だから、あなたは勇気を出した。

私は思います。どんな人、例えば世界中から非難されるような人であろうとも、同じこの小さな星で生きていかなければならない以上、心のどこかで許してほしい。関わりを避けてもいい。知らん顔して傍観者であってもかまわない。逃げて逃げて逃げ続ける人生は辛すぎるから。どんなに笑っていても、犯した罪は忘れることはないのだから、どうか生きていくことを許してほしい。

「友罪」を読んで、私がこれから生きていく上での標に出会えたような気がしました。

【選評】—読書感想文—

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城芸術協会会員

原 田 勇 男

濱乃白影さんの「手紙」を
読んで「は、東野圭吾の本「手紙」
の書評です。夢を追い続ける弟の
進学費用を工面するために窃盗に
入り、住人に発見されて殺人を犯
した兄と、そのせいで人生を狂わ
せられてしまった弟、彼らを取り
巻く冷たい世間や隣人、暖かい友
人や恋人が織りなすドラマ。この
筆者にも弟がおり、身につまされ
る思いでこの本を何度も読んだそ
うです。それだけ切実な気持ち
が伝わってきます。

もらえず、人間性も疑われ、兄と
の縁を切る決断を下してしまいま
す。筆者は自らの罪を反省し、い
つか被害者家族や自分の家族、親
類縁者、友人たちに謝罪したいと、
再生への決意を述べています。
Y・Tさんの『友罪』を読んで「
は、もし親しくなった友人が過去
に凶悪な事件を犯していたら、ど
うするかと問いかける物語です。
作品のモチーフは神戸連続児童殺
傷事件を思い起こさせる内容です
が、背景や登場人物、人間関係は
まったく別で、ノンフィクション
に限りなく近いフィクションです。

れまでの友人をすべて失くし、別
の土地でやり直してきました。そ
れだけ世間の風は冷たいのです。
しかし、筆者はどんな人でも心の
どこかで許してほしいと訴えてい
ます。その思いが胸に響きます。

主人公の弟は兄によって犯罪加
害者家族となり、幾度となく兄の
存在のために辛酸をなめさせられ
ます。世間から正当な評価をして

この筆者も罪を犯し、何度目か
の服役中で、社会に戻る度に、そ

《詩苑》

明日が明日であるために

山形刑務所

孤晩

中途半端に夢を追い
中途半端に諦めた
友や家族や恋人に
後悔無しと強がった
込み上げてくる空しさは
自虐と虚勢で塗りつぶし
揚げ句の果てに己れをも
騙しごまかし見限って
楽になりたい一心で
現実逃避を試みた
苦しいことから逃げるのが
更に苦しいことだとは
その時気付いていなかった
苦しいことから逃げるのは
己れを過去に縛りつけ
明日を否定することなのだ
あるべき明日というものは
敵しい今と向き合って
安易な欲には流されず

弱い自分を打ち破り
未来に希望を見出して
そうして初めてやってくる
時にはくじけそうになり
時には負けることもある
けれども逃げないことこそが
明日を明日たらしめる
明日が明日であるために
決して逃げない心を持つとう
明日が明日であるために
苦しいことに立ち向かおう
明日が明日であるために
己れを信じて生きてゆく

歩いて行こう

山形刑務所 九州男

歩いて行こう。立ち止まっても良いから。
振り向いて、自分の足跡を見てごらん。
ほらもう、こんなに進んで来た。
君はきつと、思ってる以上に強いから。

歩いて行こう。笑って、前を向いて。
鼻歌を歌いながらも良い。
それを見て、誰かが笑っても良い。
君は今、誰か一人を笑顔に出来た。

歩いて行こう。難しい事、考えないで。
生きてさえいれば、何とかなる。
考えたって答えの出ない事が、
この世の中にはあふれてるから。
とりあえず一歩、踏み出そう。
歩いてる内に、答えが見える事もある。

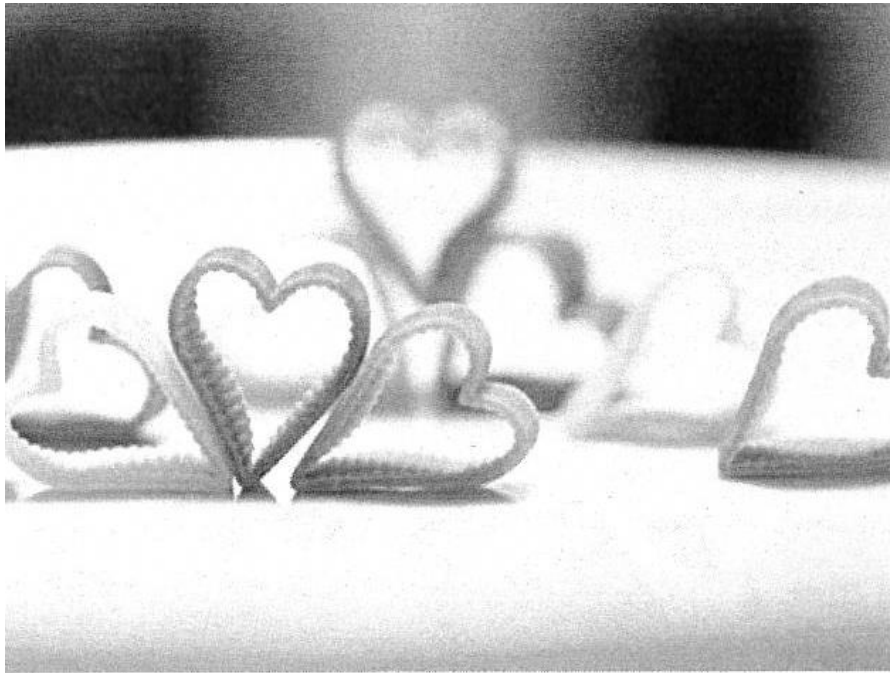
だから自分を信じて、歩いて行こう。



少女が最後に見たもの

福島刑務所 Y・T

少女が最後に見たのは：
優しいママの顔？
それともママの仮面を被った鬼？
少女が最後に見たのは：
ママに抱っこされる夢？
ランドセル背負って小学校に行く夢？
少女の身体は傷だらけでした
殴られた痣 父親の虐待のあと
痛かっただろうに 苦しかっただろうに
それでも少女はノートに書きました
「もうしません ゆるしてください
たすけてください おねがいます」
でも きっとママが助けてくれるって
そう信じながら 星になりました
少女が最後に見たのは：
大好きなママの顔であってほしい
そうじゃないと悲しすぎるから
少女はいつでもママが大好きだったから



空はいろいろな表情をする。
澄みきって雲一つない青空。
どんよりとした暗い空。
小雨の降る静かな空。
雷の鳴り響く激しい空。
空は私の気持ちと似ている。
嬉しい時、澄んだ青空を見上げる。
落ち込んだ時、どんよりした空を見上げる。
悲しい時、静かに雨が降る空を見上げる。
何もかも嫌になった時、雷の鳴る空を見上げる。
空も私も生きている。
生きているから、いろいろな表情をする。
いろいろな表情ができるということ。
それは、生きている証。
この世に存在しているということ。
空は私と大切な人をつないでくれる。
大切な人も、この空を見上げてくれる。
それは単に天気を見ているだけかも知れない。
何かを思いながら見上げているのかもしれない。
空は私の気持ちを知っている。
私は空に向かって想いを込めて祈る。
大切な人が元気でありますようにと。
いつかまた、必ず会えますようにと。

空は何も答えてはくれない。
けれども、私の想いを大切な人に届けてくれる。
遠く離れていても、空が私と大切な人をつなげてくれる。
いつも心で通じている。
生きるということ。
それはいろいろな表情をして、今ここで息をしているということ。
同じ空を見上げて、いつか大切な人と笑い合うということ。
私は今日も空と生きている。

虹

福島刑務支所 M・M

今朝 虹を見た
大きな大きな虹を見た

今 ここから見上げる空は
四角く切り取られているけれど

私は知っている

この空は 強さをくれた空

大切な人達とつながっていることを

上を向いて生きることがを

教えてくれた空

私は知っている

この空は 私の心の鏡

晴れの日ばかりじゃないけれど

止まない雨もないことを

私を成長させてくれた空

どしゃぶりさえも私を潤し育む栄養になる

私を見守ってくれた空

私は知っている

この空は背中を押してくれる空

いつか必ず扉は開く

その日は必ずやってくる

未来を信じ 前に進む一歩を

その勇気をくれる空

そして翔く

陽がさせば虹の出る

この空を

四角くない空を

さえぎるもののない大空を

私は翔く

両手の翼を広げて

あの虹の向こうへ

今朝 虹を見た

大きな大きな虹を見た

虹が見せてくれた未来の自分を見た

【選評】—詩—

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県芸術協会会員

原 田 勇 男

M・Mさんの「虹」は、見上げる空との関わりをきめ細かに書いています。空は大切な人達とつながっている、上を向いて生きることを教えてくれる、心の鏡になって背中を押してくれれます。そして作者は虹に未来の自分を見ています。端正で美しい作品です。

T・Aさんの「空と私」も、空とともに生きていることを表現しています。「空はいろいろな表情をしています」「空も私も生きている」「空は私の気持ちを知っている」と共感を寄せます。一番伝えたかったのは「空は私と大切な人をつないでくれる」ことでしょう。

Y・Tさんの「少女が最後に見

たもの」は、虐待されて亡くなった少女の切ない気持ちに思いを寄せている作品です。少女はノートに謝罪と許しを訴えていました。彼女が死ぬ瞬間に見たのが「大好きなママの顔であってほしい」と願う気持ちはよくわかります。

孤晩さんの「明日が明日であるために」は、中途半端な夢を失い、自虐と虚勢から現実逃避をした自分を反省。厳しい現実と向き合い、自分を律して明日に向かう自分の生き方を求めます。「明日が明日であるために／己を信じて生きてゆく」と力強く結んでいます。

九州男さんの「歩いて行こう」は、前向きで向日的な作品です。

立ち止まってもいい、誰かが笑ってもいい、難しいことを考えないでいい、とりあえず一步を踏み出そうと励ましています。シンプルな行動力の精神がこの作品を生かしています。

《歌壇》

春の蚊を叩いて響く獄の夜に遠くで止まる巡回の足

青森刑務所 K・Y

触覚が視覚にまさりいつしかに半紙の表裏たしかめている

青森刑務所 M・Y

『御釜』なる青き水面に黄金の月を浮かべて蔵王しづもる

宮城刑務所 浄命美心

送り火に代へて唱へん阿弥陀経母よ帰れよ彼のお浄土に

宮城刑務所 桜子

くろがねの窓の格子のきんと冷え煩惱満つる獄の除夜の音

宮城刑務所 旭

日々使う電気剃刀髭貯まり石灰のごとく白い粉なる

宮城刑務所 S・T

風向きによって聞こえる学校のチャイムのように思い出す人

宮城刑務所 K・M

団子虫ふたたび歩み出すまでの小さな時が子の掌に光る

宮城刑務所 K・M

射千玉の暗き獄舎にひとり座し灯火の下に母の文読む

秋田刑務所 O・M

独房の灯に誘われて死にゆける名もなき虫をぢっと見つむる

山形刑務所 弘雀

十年余着続けてきた仕事着にお疲れ様とそっと腕抜く

山形刑務所 孤晩

朝の陽がいつもと違って見えたのは看守の訓示に胸うたれたから山形刑務所 裕鴨

心では謝ってると言う君に一本多く載せる海老天 山形刑務所 十三郎

生きているただ漫然と生きている生かされている意味考えず 山形刑務所 曼珠沙華

汗流し取り組む作業の心地よく働く喜び思い出したる 山形刑務所 曼珠沙華

濡れた葉に朝の陽射しが反射して故郷の空は秋の高さだ

山形刑務所 梵天丸

雨風が強くなるたび被災地に二次災害のなきこと祈る

山形刑務所 蟹牡丹

白球を追いし球児の夢のあと晩夏を告げるサイレン響く

山形刑務所 聖天

薫風がわたる聖堂仰ぎおり誓いしことのいまは儚く

山形刑務所 風来坊

卒寿越え矍鑠極まる祖父による励ましの文に今日も奮いて

山形刑務所 咲良善仙

弟よこれで最後にしてくれとアクリル越しに道を説く兄

福島刑務所 S・G

夕に咲き朝にしぼむる夕顔はそむく我が身と生きざま似たり

福島刑務支所 K・K

丁度良い君との距離が見つかったそうだ僕らは回転木馬

福島刑務支所 S・S

運ばれし我の朝餉の味そ汁が一人の部屋に寂しく匂う

福島刑務支所 E・K

あなたが好きだと言った松葉菊色鮮やかにピンクに咲けり

福島刑務支所 K・M

大切な家族の幸せ短冊に書いて祈りし七夕の夜

福島刑務支所 K・A

古書店で本のしおりの押し花に誰かの記憶そっと探しに

福島刑務支所 F・K

終わりになき償いの道を独り行く尽きることなき後悔共に

福島刑務支所 M・M

空にだってある悲しみと悩みの日吐きだすように大雪が降る

福島刑務支所 S・M

おかあさんみえるかなあと塀の外日暮れてもなお佇む我が子

福島刑務支所 H・E

【選評】—短歌—

短歌結社「橄欖」運営委員

宮城県芸術協会運営委員兼編集委員

日本歌人クラブ会員

伊藤 久子

短歌は普通読む人の心の中に情景がはつきりと描かれる作品が佳しとされます。それには一首の中に具体的に事柄を詠む事が大切で

す。自身が行う労働だったり、場所だったり、光景だったり、感動を詩に高めましょう。

今年の作品の中には佳いと思われる短歌が多くありました。次に幾首か挙げて見ます。

○春の蚊を叩いて響く獄の夜に遠くで止まる巡回の足

K・Y

【評】春の蚊を、思い切り両手で叩いた。コンクリートの舎内の静寂を破ってはっとした時、看守の

足音が遠くにして胸をなでおろした。と言う具体的で聴覚に訴えた歌になりました。

○十年余着続けてきた仕事着にお疲れ様とそつと腕抜く

孤晩

【評】刑期が終わったのでしょうか。十年余り作業に着続けた仕事着をいたわる優しい作者の気持ち「お疲れ様」に表れていて、「そつと腕抜く」が仕事着に愛着も感じさせてくれます。

○団子虫ふたたび歩み出すまでの小さな時が子の掌に光る

K・M

【評】握りしめた子の掌を開けた時ダンゴ虫が再び這い始めた。やっぱり生きていた、その僅かな時々のときめきを捉えて巧みな描写が成功。

○運ばれし我の朝餉の味噌汁が一人の部屋に寂しく匂う

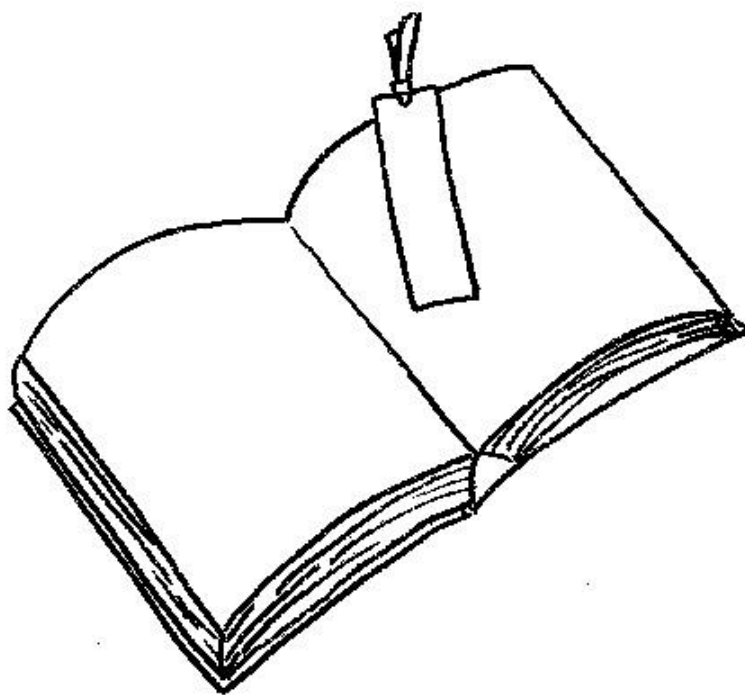
E・K

【評】独房なのか、朝餉の良い香りを共に味わう家族の無い寂しさが浮かんで来て真実味が伝わる。「味噌汁」と言う、さもない具体が生きた。

○古書店で本のしおりの押し花に誰かの記憶そつと探した

【評】作者の思い出でしょうか。
古書店での事、押し花を挟んだ誰
か、その誰かに、思いを馳せ短歌
の中にポエムが生まれました。

F・K



《俳壇》

処暑の日の小鳥謳歌す鉄格子

青森刑務所 W・H

東京を遠しと思う秋の夜

青森刑務所 M・Y

目覚しの替わりになりし蝉時雨

宮城刑務所 K・T

足元はすでに暗闇秋の暮

宮城刑務所 S・W

水しぶき少し離れて滝見茶屋

宮城刑務所 浄命美心

老囚の問わず語りや秋の夜

宮城刑務所 シオン

油蟬作業帰りを癒やしけり

宮城刑務所 S・T

獄庭にほのかに灯る花明り

宮城刑務所 H・A

締め花火今年の夏もありがとう

宮城刑務所 K・Y

蜻蛉来てわが思ひ出に止まりけり

宮城刑務所 K・M

踏切を渡り終えたる夏茜

秋田刑務所 O・M

しんしんと降る雪音に耳すます

山形刑務所 九州男

ふるさとの野焼きの香に走り出す

山形刑務所 不二天風

たまゆらの深き静寂や揚げ花火

山形刑務所 弘雀

抜け道の花吹雪吾を祝ぎくるる

山形刑務所 白岳

かげろうよ抜け殻置いてどこへ行く

山形刑務所 孤晩

鶏頭の狂気のせまる紅の色

山形刑務所 仁和

暮れなずむ南の空に遠花火

山形刑務所 龍齋

逢えずいる妻と娘に似た母子草

山形刑務所 龍宮城

遠雷の如くに響く花火聴く

山形刑務所 曼珠沙華

ふるさとの友を思いぬ金魚鉢

山形刑務所 蟹牡丹

競い合う蝉の鳴き声太鼓の音

山形刑務所 聖天

雛霰せがみし子らは遠い空

山形刑務所 咲良善仙

立つ鳥に熟柿はじけぬアスファルト

山形刑務所 米氏愚

いつまでも眺めていたい流れ星

福島刑務所 ○・J

彼岸会や涙で煙る姉の文

福島刑務所 W・T

ふれたくもこの身かなわぬ百日草

福島刑務支所 N・A

獄庭に今年も来たる赤とんぼ

福島刑務支所 S・N

梅雨入り町に溢れる傘の花

福島刑務支所 K・N

肩車花火見る子の特等席

福島刑務支所 F・K

【選評】—俳句—

「天為」「春耕」同人 岩田 諒

俳句は、主に日常卑近の言葉によつて、表現される。それは、俳句が、日常語によらなければ捉えられない領域を指しているからである。しかし、日常語といえど、正しい姿において用いられなければならぬ。つまり、表現されたものが、「作品化」されなければならぬ。

老囚の間わず語りや秋の夜

シオン

「老囚」の「老」の一字が、一句を支える。独り言のように語る話は、どのような内容だったのだろうか。話し手も聞き手も、しみりと共有する時間と空間が伝わって来る。「秋の夜」が、上五中七を受け止め、よく座っている。

油蟬作業帰りを癒しけり

S・T

(加筆した句もあります。)

かしましく鳴きたてる油蟬。一般には、鑑賞の対象とされることは少ない。その油蟬の声も、一日の労働に疲れた者にとっては、生命の証なのだ。自分を冷静に暖かく見守る、作者の生き方に共感する。

遠雷の如くに響く花火聴く

曼珠沙華

「遠雷の如くに響く花火」までは、そのままの叙述。最後の一語「聞く」によつて、一挙に俳句となった。見るものである。「花火」を「聞く」ほかない境遇。重病の場合もあるだろう。読者に様々な想像をさせてくれる。

《柳 壇》

しあわせを色鉛筆で描けた頃

青森刑務所 M・Y

人生はダルマのごとく生きて行け

宮城刑務所 S・W

敗けて泣く涙もいいな決勝戦

宮城刑務所 浄命美心

七輪の染みる煙りと秋魚

宮城刑務所 カリカリ

若人の五輪を目指す汗光る

宮城刑務所 力風

どこいしよ声に出すから年がばれ

宮城刑務所 K・M

真ん丸の月に重ねし孫の顔

山形刑務所 火拳

カレンダー何度も見違える出所前

山形刑務所 孤晩

押し花の四季の便りに母の景

山形刑務所 白岳

古希近しハンテン下付に嬉しくて

山形刑務所 仁和

最後には無神論者も神頼み

山形刑務所 龍宮城

古い父の最後の面会誕生日

山形刑務所 曼珠沙華

夢の中いつも出ている塀の外

山形刑務所 O・Y

母の日に独り寂しく花を描く

山形刑務所 蟹牡丹

短髪を引かれし午後の面会所

山形刑務所 咲良善仙

飯残す者よ感謝は捨るなと

山形刑務所 米氏愚

減る記憶それでも増えるパスワード

福島刑務所 U・T

くだらないうわさ話に惑わされ

福島刑務支所 S・N

塩むすび無償の愛の母の味

福島刑務支所 K・M

どこいても見上げる空はただひとつ

福島刑務支所 K・A

軒先に恋を運んだ通り雨

福島刑務支所 K・N

何げない人の気遣い身にしみる

福島刑務支所 E・M

幼き頃特等席は祖父の膝

福島刑務支所 S・M



【選評】—川柳—

川柳宮城野社同人
宮城県芸術協会委員

佐藤岩男

今年は、三十九名の方々からの百十一句の川柳を読ませていただきました。昨年にも増して佳句が多く、二十余句を選び出すのはとても大変でした。

過ぎ去った日々のあれこれ、現在の自分、これからの生き方等をじっくり考えた句が多かった中で、現在の社会の姿をきちんと掴まえた句も少なくありませんでした。

ご存知のように川柳は、五音・七音・五音の十七音を使って自分の気持ち（喜怒哀楽）を表現し、読み手に伝えようとするものです。だから、話し言葉で分かりやすく作ることを心がけ、無理に難しい表現や難しい漢字を使う必要はありません。読み手により大きな感銘を伝えることが

できれば、それで良いのではないのでしょうか。

ただ、作者の伝えようとする事が、読み手に伝わらない事があるようです。これは、川柳等の文芸作品に限らず絵画などの芸術作品全般に言えることでしょうか。発表当時はそれ程評価されていなかった作品も、後になって高い評価を受け、絶賛されるようになってきた例も数多くあります。

兎に角、先人達の「佳句」をいっぱい読んでみるうちに、佳句とそうでない句の別が分かってきます。誰にでも分かる、そして誰にでも創れない句を目指して下さい。

佳句佳吟一読明快いつの世も

近江 砂人

第44回東北ブロック書画コンクール
入賞作品

東北ブロック書画コンクールについて

当管区では、毎年、管内刑事施設の受刑者及び少年院の在院者に対して、書（毛筆及び硬筆）、絵画及びポスター・カレンダーの作品を募集し、各分野の専門家の先生の御協力のもと、東北ブロック書画コンクールを開催しております。

本誌では、同コンクールの入賞作品を、審査員の先生の選評とともに掲載いたしました。

絵画の部

金 賞



『緑蝕の星卵・少女の思考』

山形刑務所 T・S

【選評】 点描の美しい少女に心が洗われるすばらしい作品

※表紙掲載作品

銀 賞



「黄揚羽」

山形刑務所 K・K

選評 黄揚羽を立体的に
堂々と中心に描いた。



「イギリス ウェストゲートガーデン」

福島刑務支所 M・E

選評 イギリスの建物と花畑の
風景をさわやかに描いた。

銅 賞



「オルゴール」

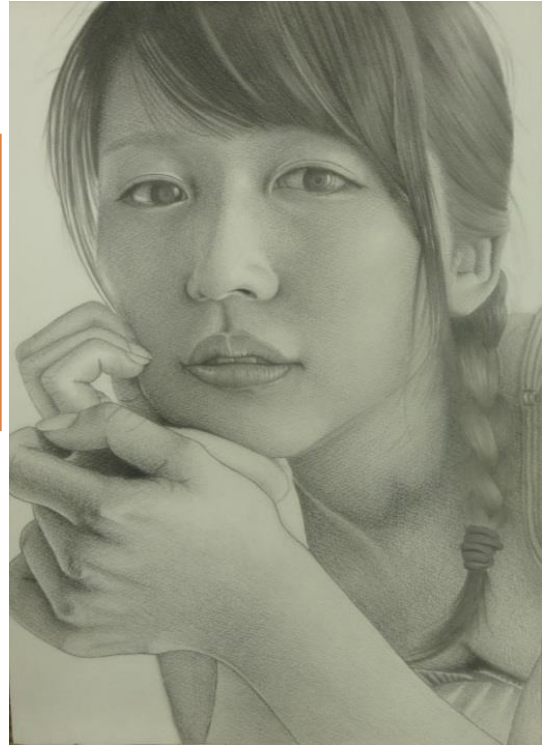
山形刑務所 H・I

選評 見ているだけで、オルゴールのメロディーが聞こえてくるような表現がみごと。

「まなざし」

山形刑務所 K・M

選評 鉛筆だけで、少女の顔だけでなく性格まで伝わってくる絵



「風車のある街」

宮城刑務所 M・W

選評 オランダの風車を明るいタッチで美しく表現。チューリップも美しい。

佳 作



「羽田空港」
山形刑務所 M・M



「尾上の夕日」
盛岡少年刑務所 R・K



「金沢の軍艦島」
宮城刑務所 K・M



「一匹龍」
福島刑務所 O・M



「船弁慶平知盛」
青森刑務所 A・Y

ポスター・カレンダーの部

金 賞

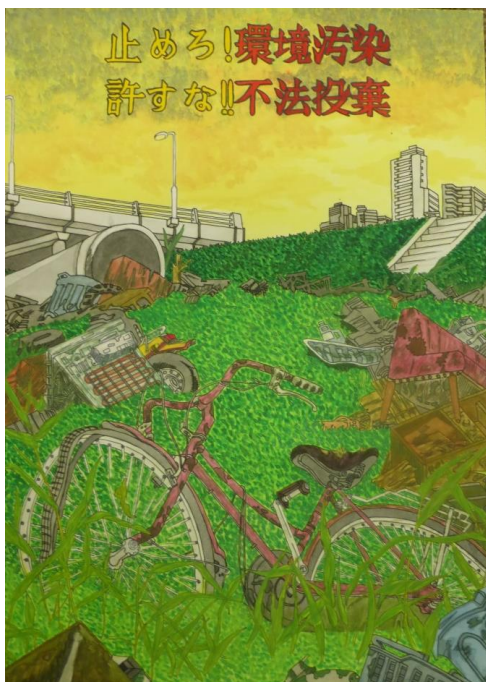


「水道はこまめに止めて節水を」

山形刑務所 M・M

選評 さわやかな水を画面全体に感じさせているところに引かれます。

銀 賞



「止めろ環境汚染」
福島刑務所 W・G
選評 丁寧な作品づくりが魅力です。
文字が大きいともっと良いです。

銅 賞



「山形の夏祭」
山形刑務所 S・U
選評 八月のカレンダーにふさわ
しい図柄です。丁寧な作品づく
りも良いです。

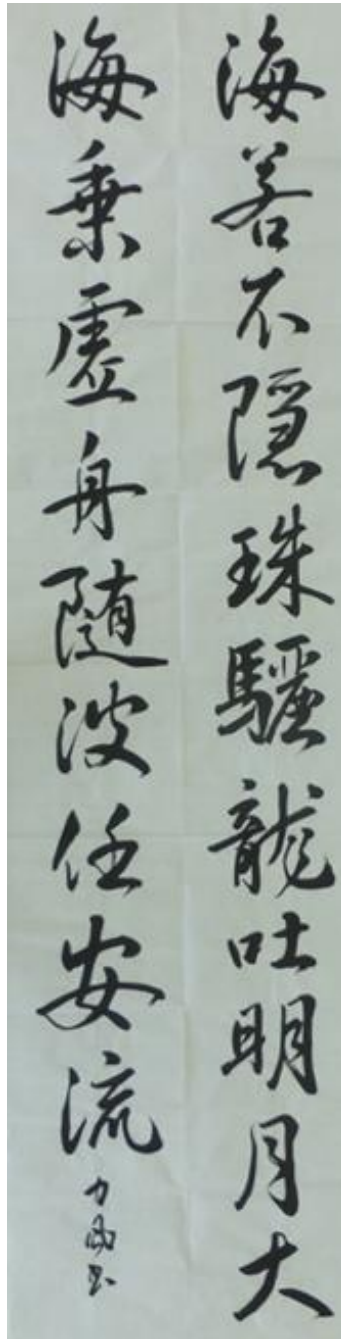
佳 作



「8月カレンダー」
山形刑務所 K・K
選評 レタリング等素晴らしいで
す。氷菓子があればもっと
良いです。

毛筆の部

金 賞



「李白詩」

宮城刑務所 力風

選評 基礎がしっかりしており、文字の形態、全体の構成も素晴らしい。

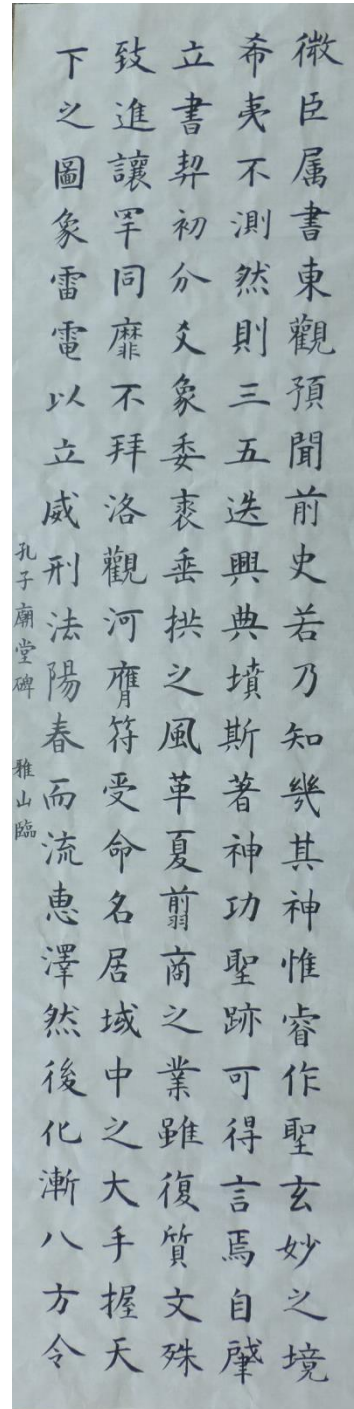
銀賞



「漁夫」

宮城刑務所 雅鳳

選評 隷書の基本をマスターしており、安定感のある秀作

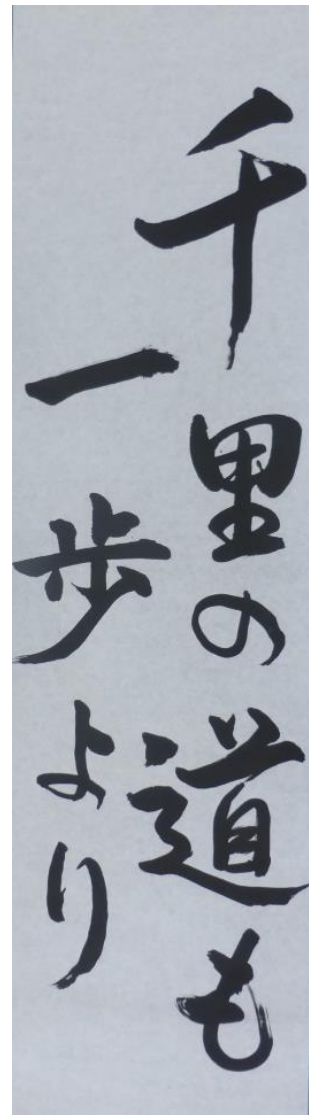
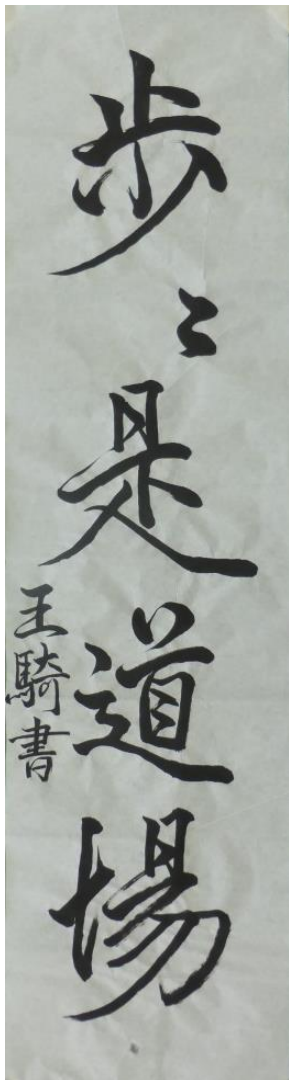


「孔子廟堂碑」

山形刑務所 雅山臨

選評 原帖の特徴を良く捉えており、品位のある作品

銅 賞

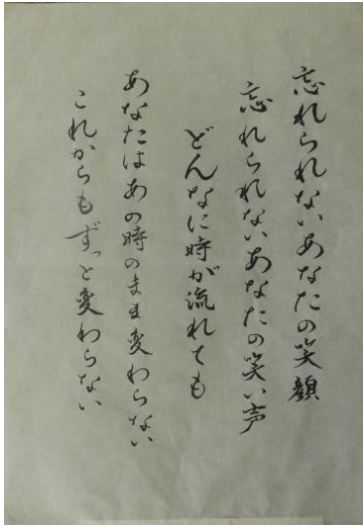


「歩々是道場」
青森刑務所 王騎
選評 伸び伸びと
表現した作品

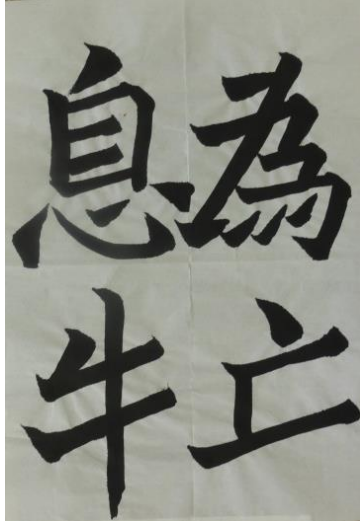
「般若心経」
秋田刑務所 M・T
選評 一字一字を丁
寧に書作した努
力作

「千里の道も一歩より」
盛岡少年刑務所 T・Y
選評 力強く堂どう
とした作品

佳 作



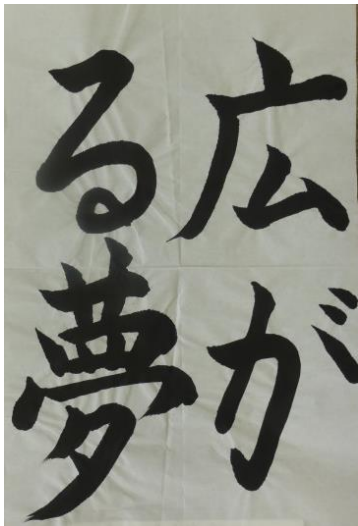
「忘れられないあなたの笑顔」
福島刑務支所 S・S



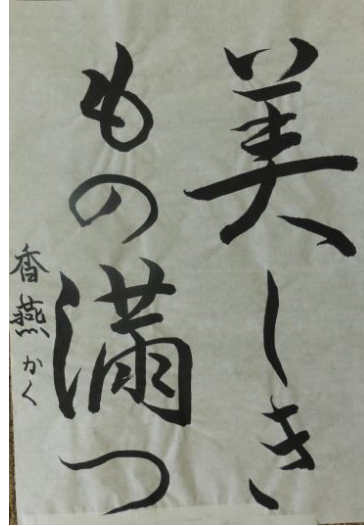
「為亡息牛～牛楯造像記より～」
盛岡少年刑務所 M・M



「作制明法」
山形刑務所 G・W



「広がる夢」
盛岡少年刑務所 M・I



「美しきもの満つ」
青森刑務所 W・T

硬筆の部

金 賞

禅語・知足（足るを知る）
今与えられているものに満足し、
感謝するということ。今持っている
もの、そばにいてくれる人、置かれ
た状況、すべて大切な縁によって
結ばれたもの。自分の身の文を知り
欲望に支配されないことが大切。

「禅語・知足（足るを知る）」

福島刑務支所 M・M

選評 自身の現在の思いを、力強くしっかり
表現している。

銀賞

最上文章。	影、	佩。	裡	林			
上	、	。草	聽	間			
文	間	際	来、	松			
章	中	煙	識	韻、			
。	觀	光、	天	石			
	去、	水	地	上			
	見	心	自	泉			
	乾	雲	然	声			
	坤		鳴	静			

菜根譚

洪自誠

「菜根譚」

山形刑務所 K・N

選評 一字一字丁寧に書いており、全体として良くまとまっている。

銅賞

「論語」

盛岡少年刑務所 I・K

選評 力強くしっかりとした文字

論語

孔子

予、否ざる所の者は
天これを厭てん
天これを厭てん
天これを厭てん

佳 作

友江
由利公正
硯の海に浮かぶ思いのかず
かずの書き尽くせぬは涙な
りけり勳なく我身は今に
永らへて世にも人にも恥ぢ
ざらぬやは

「友江」

福島刑務所 S・G

孫子
彼れを知りて己を知れば
百戦して殆うからず
彼れを知らずして己を知れば
一勝一負す
彼れを知らず己を知らざれば
戦う毎に必ず殆うし

「彼を知りて己を・・・」

青森刑務所 K・N

孔子
良心に照らして
少しもやましいところば
なければ
何を悩むことがあろうか

「(無題)」

山形刑務所 H・T

第四十四回東北ブロック書画コンクール審査総評

【絵画の部】

例年になく秀れた作品が多く、見ごたえのある審査で感動させられた。特に、山形事務所の出品作は、どれも充実して上位の賞を独占する結果となった。指導の先生方にも敬意を表したい。

【ポスター・カレンダーの部】

良い作品が多く、選ぶのに悩みました。ポスターは、テーマに合う図柄であること、多くの人が遠くからでも知ることができる文字であることが大切です。カレンダーは、季節に合う図柄であることや、数字の正確さが大事です。それらを考え選んでます。

— 審査員 — 宮城県芸術協会運営委員

枡澤 怜

宮城県芸術協会運営委員

鈴木 智枝

宮城県芸術協会執行理事

吉田 利弘

【毛筆の部】

日頃の練習の成果が、作品を通して十分感じさせる作品が多かった。今後も益々精進されます事を希望いたします。

【硬筆の部】

題材として、日頃の自身の思いを選んだ作品が多く、心の込もった力強く確かな表現の作品が多く見られた。

— 審査員 — 東北書道会副会長

鈴木 霽月

東北書道会副会長

村山 柳雅

編集後記

本年度も各施設から多数の作品が寄せられ、本文芸術品の発刊の運びとなりました。

本号の課題文のテーマは「居場所」でした。自分の「居場所」とは何処なのか、戻るべき「居場所」とは何か、「居場所」についての皆さんの思いが書かれていました。その内容や筆致から「居場所」を守るため、取り戻すための、覚悟や決意が伝わってきました。また、自分から「居場所」を遠ざけてしまっていた後悔も伝わってきました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

「みちのく」成人編第39号
平成31年2月発行

編集発行 仙台矯正管区第三部
〒984-0825 仙台市若林区古城3-23-1
TEL 022-286-0178